

夕立遺跡

— 平成 4 年度県営圃場整備事業榎木地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書 —

1993

茅野市教育委員会

序 文

夕立遺跡は、八ヶ岳の山麓台地上では珍しい先土器時代の遺跡です。近年の圃場整備事業の進展にともない、市内各所で多くの遺跡が調査されました。桝木地区でも平成2年度、3年度に上見遺跡、中原遺跡の調査が行なわれ、先土器時代の遺跡も発見されましたが、夕立遺跡ほど多量の遺物が出土し、生活の様子をかいま見ることのできる先土器時代の遺跡が調査されたのは、市内でははじめてのことです。茅野市は縄文時代に栄えた地として全国に知られていますが、先土器時代の遺跡も黒曜石の原産地とともに数多く残されています。夕立遺跡の調査成果が、1万年前をさかのほる先土器時代の生活を知る手がかりとなれば幸いです。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地元地権者、関係機関の皆様の深いご理解とご助力により、発掘調査を無事終了することができました。心からお礼申し上げます。

平成5年3月

茅野市教育委員会

教育長 両角 昭二

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境.....	4
第Ⅲ章 周辺の遺跡.....	4
第Ⅳ章 遺構と遺物.....	5
第1節 遺跡の層序.....	5
第2節 先土器時代の遺構と遺物.....	8
第3節 縄文時代の遺構と遺物.....	9
第Ⅴ章 今後の課題.....	12

第1章 発掘調査の概要

茅野市根木地区の県営圃場整備事業の進展にともない、夕立遺跡の緊急発掘調査が必要となった。平成4年3月26日に、長野県教育委員会文化課、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室の4者により保護協議が行なわれた。この協議の結果により、平成4年4月2日付教文第7-81-14号が長野県教育委員会より提出された。その内容は、夕立遺跡の保護については発掘調査による記録保存とし、発掘調査に伴う経費は諏訪地方事務所の負担とするが、農家負担額については文化財側で負担すること、発掘調査は茅野市教育委員会に委託するというものであった。計画書によると、230m²以上を発掘対象とするものであった。平成4年5月11日付源地土第26号をもって、埋蔵文化財包蔵地発掘委託契約書を取交わし、発掘調査の実施となった。

現地調査は平成4年5月26日より開始した。表土剥ぎ作業前に現地踏査を行ない、表面採集を行なった。本遺跡は当初繩文時代の遺跡であると考えられていたが、表土剥ぎ作業開始直前に、作業員が植状剝離を有する尖頭器1点を採集したことから、先土器時代の遺跡であることが判明した。トレンチ法による調査の結果、遺跡範囲のうち南半部は耕地の造成により削平されていたため、調査区を北半部に限って調査を行なった(第2図)。調査区の表土剥ぎ作業は重機により行なったが、これが調査内容の質を左右する結果となつた。すなわち自然堆積層である黒色土の一部を重機により取除いた結果、繩文時代の包含層の一部と、先土器時代の包含層の上部を破壊してしまつた。調査区内の調査はグリッド法により行ない(第2図)、グリッドの設定にあたっては茅野市農業基盤整備課に御協力頂いた。

調査の進展に伴い先土器時代の遺物が多出し、当初の計画をはるかに越えた作業量となつたため、調査後半には夜間作業を行なわねばならない状態にいたつた。また圃場整備のための工事が進展する中で、当初設定した調査区の範囲外にも遺跡が広がっていることが明らかとなり、急速調査第II区を設定し調査に入ったが、遺跡層序の中での広がりを把握できた程度で、遺物出土地点の計測を行なつてない部分が多い。調査は圃場整備の手が加わらない部分を残し、11月11日に終了した。

遺物整理および概要報告書の作成は、調査期間中も雨天時を利用して行なつたが、本格的に整理執筆に取掛かったのは、他遺跡の調査が終了した後の2月8日からである。

現地調査期間中に両角昭二茅野市教育委員会教育長、北澤和男長野県教育委員会指導主事(専攻 地質学)、戸沢充則明治大学文学部教授、河西学帝京大学山梨文化財研究所研究員の指導を賜わつた。また多くの来訪者を得て、多大な御助言、御指導をいただいた。下に記し、感謝の意を表わしたい。

來訪者、資料見学者名簿（五十音順）

青木正洋（諏訪市教育委員会）、阿部義男（茅野市文化財審議委員）、市沢英利（長野県教育委員会文化課）、牛山市弥（茅野市文化財審議委員）、大竹憲昭（長野県教育委員会文化課）、織笠昭（東海大学文学部教授）、金山喜昭（千葉県野田市郷土館学芸員）、五味裕史（諏訪市教育委員会）、須藤隆司（佐久市教育委員会）、高見俊樹（諏訪市史編纂室）、田中總（諏訪市史編纂室嘱託）、竹村美幸（茅野市文化財審議委員）、堤 隆（御代田町教育委員会）、保坂康夫（山梨県埋蔵文化財センター）、宮坂清（下諏訪町教育委員会）、宮坂光昭（諏訪市史編纂室）、稻垣尚美（富山县小杉町教育委員会）

調査組織

調査主体者 両角 咲二（茅野市教育委員会教育長）

事務局 原 光（茅野市教育委員会次長）
永田 光弘（茅野市教育委員会文化財調査室長）
鶴岡 幸雄（茅野市教育委員会文化財調査室係長）
両角 一夫（茅野市教育委員会文化財調査室主任）
大月 三千代（茅野市教育委員会文化財調査室主事補）

調査担当 守矢 昌文（茅野市教育委員会文化財調査室主任）
小林 深志（茅野市教育委員会文化財調査室指導主事）
小池 信史（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
功刀 司（茅野市教育委員会文化財調査室主事）（現場、報告書作成担当）
百瀬 一郎（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
小林 健治（茅野市教育委員会文化財調査室主事）
山崎 貴弘（茅野市教育委員会文化財調査室嘱託）
五味 みゆき（茅野市教育委員会文化財調査室嘱託）

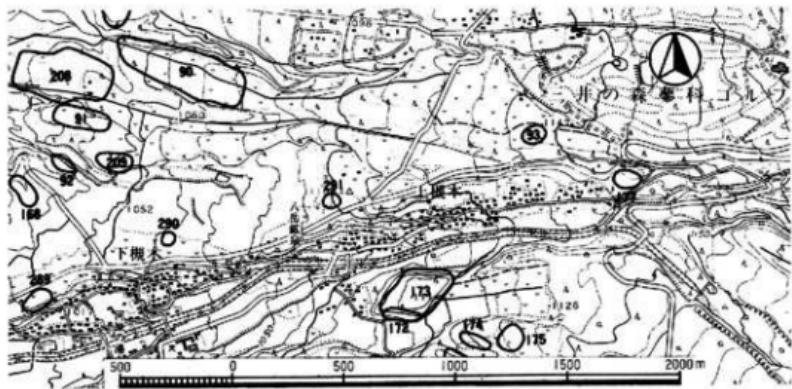
調査補助員 赤堀 彰子

発掘作業参加者

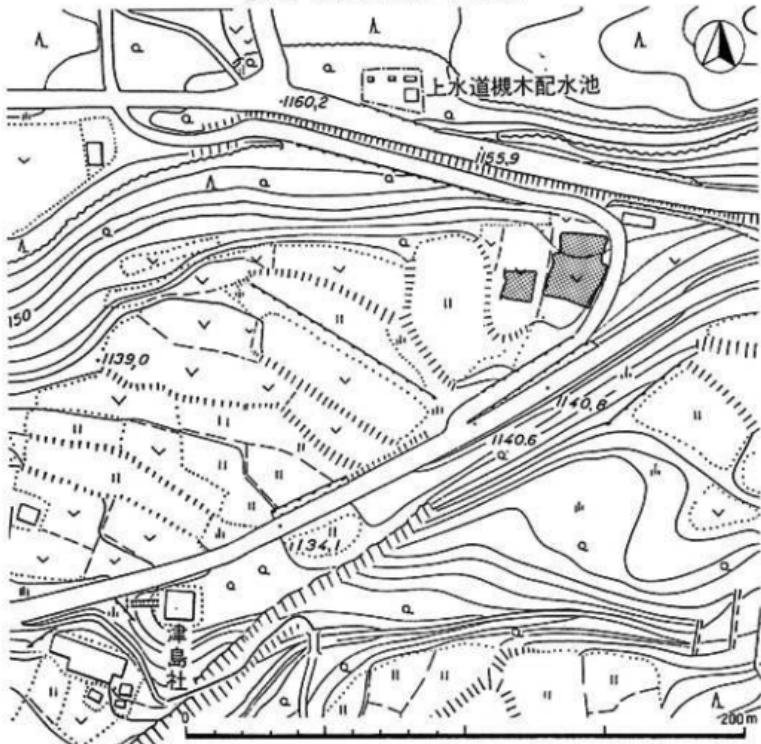
伊藤 千代美

調査協力者

牛山 たてみ 牛山 徳博 小沢 寅年 小林 幸 武居 八千代
原 ちよ子 平沢 秀喜 平沢 房江 平沢 美知 矢島 のぶ子



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)



第2図 遺跡周辺の地形 (1/)

第II章 遺跡の位置と環境

夕立遺跡は茅野市泉野上櫻木に所在している(第1図)。上櫻木の集落は柳川右岸に形成された段丘上に位置するが、夕立遺跡はこの段丘の東端付近に立地している。遺跡地周辺の段丘面の幅は狭く、幅約20mの南面する緩傾斜面となっている(第2図)。

北八ヶ岳西麓の地形区分によれば、夕立遺跡は第III段丘(芹が沢面)にあたり、新期ロームの一部が堆積するとされている(源訪の自然誌地質編集委員会 1975)。遺跡の東側は奥行の浅い谷上の地形により段丘面が跡切れ、下位の段丘面に続く斜面となる。西側は段丘面が緩やかに傾斜しながら、上櫻木の集落へと続いている。遺跡の南は、第IV段丘面にあたる緩傾斜面をはさみ、鳴岩川の氾濫原につづく急斜面となっている。氾濫原と遺跡の比高差は約20mある。遺跡からは対岸の南八ヶ岳西南麓の台地、鳴岩川と柳川の合流地点を臨むことができる。道路北側には北八ヶ岳の山麓台地からの急傾斜面が迫っている。台地平坦面との比高差は約12mである。

夕立遺跡の前面を流れる鳴岩川は、源流を北八ヶ岳山中に発し、夕立遺跡付近で柳川と合流する。鳴岩川の水質は酸性を示し、魚も棲まず飲料水としても不適当であるといわれている。鳴岩川あるいは柳川の水質が酸性を示す原因は、八ヶ岳の硫化鉄質地や火山性の温泉が源流となっているためである(茅野市教育委員会 1986)。両河川の水質が、夕立遺跡を営んだ集団の生活にどのような影響を及ぼしたのか明らかでないが、先土器時代遺跡の選地傾向を考える上で重要な環境要因の一つであると考えられる。

第III章 周辺の遺跡

柳川沿いの第III段丘面上には、夕立遺跡以外の遺跡は知られていない。第II段丘面上には柳川が形成した渓谷を臨む位置に遺跡が点在するほか、柳川左岸の山麓台地上および大泉山東側付近の山麓台地の末端が開析され分岐している地点に遺跡が集中している(第1図)。

夕立遺跡(Na177)では、先土器時代と縄文時代中期初頭の2時期にわたり生活的痕跡が認められた。夕立遺跡周辺における先土器時代の遺跡としては、柳川と鳴岩川にはさまれた地点に位置する御猪岩遺跡(茅野市遺跡合帳No280)、大泉山東方の上見遺跡(Na168)、稗田頭A遺跡(Na91)、鴨川遺跡(Na90)稗田頭B遺跡(Na209)がある。このうち造構を検出できた遺跡は上見遺跡のみで、ブロック1基が検出されている。出土遺物にはナイフ形石器1点、石核3点などがある(茅野市教育委員会 1991b)。他の遺跡からは、先土器時代の造構は検出されていない。御猪岩遺跡からは刃器状剥片2点(茅野市教育委員会 1986)、稗田頭A遺跡からはチャート製の尖頭器1点、黒曜石製剥片1点(報告書作成中)、鴨川遺跡からは黒曜石製ナイフ形石器1点(茅野市教育委員会 1992)が出土し、稗田頭B遺跡は未調査遺跡であるが、地元の方によりナイフ

形石器 1 点が表面採集されている。上見遺跡、稗田頭 A 遺跡はともに、大泉山と山麓台地末端との間に形成された低地を臨む地点に立地している。

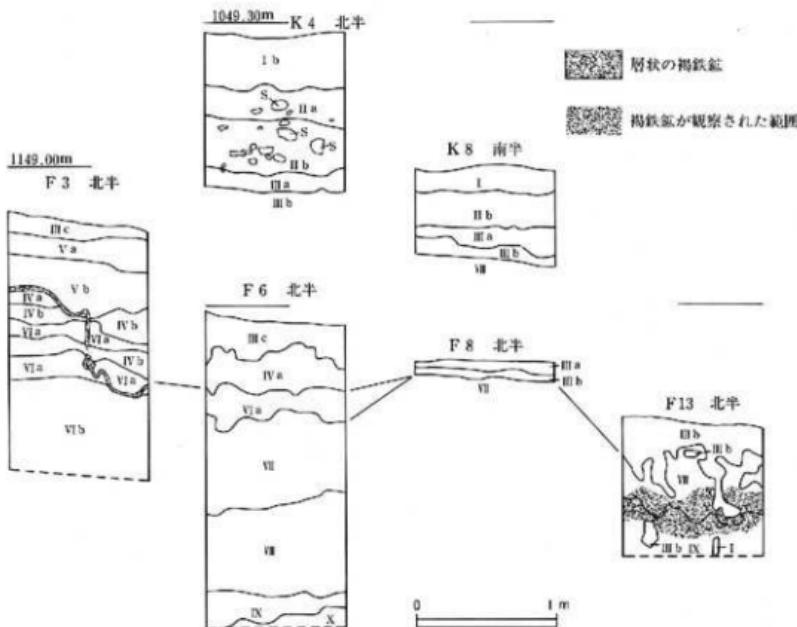
八ヶ岳山麓台地における縄文時代遺跡の初源は金堀場 (No.208)、与助尾根遺跡から採集された有茎尖頭器に始まる。櫻木地区周辺においては、中原遺跡 (No.92) の前期末前期初頭に営まれた 2 基の住居址を経て、本格的に遺跡群が展開するのは前期末中期初頭からである。上見遺跡、稗田頭 A 遺跡からは縄文時代の陥穴が検出されているが、前期末中期初頭以前のものであろうという以外に詳しいことはわからない。縄文時代前期末から中期初頭の遺物が採集された遺跡は多く、現在までに調査された遺跡には上見、中原、鴨田、稗田頭 A 遺跡があり、前期末の遺物が出上した未調査遺跡には金堀場、丸生戸遺跡 (No.172) がある。前期末中期初頭の集落址は、大形住居址 1 基が検出された中原遺跡のみである。集落址の調査例が少ないのに対し、上見、鴨田、稗田頭 A 遺跡では中期初頭の土坑が多く検出された。現時点では、前期末中期初頭における櫻木周辺の遺跡群の形成は、土坑群を主体的な造構とする遺跡によって始まるとすることができる。

第IV章 遺構と遺物

第1節 遺跡の層序

夕立遺跡は北八ヶ岳西麓地域の地形面区分における第III段丘面上に位置する (諏訪の自然誌地質編集委員会 1975)。遺跡が斜面に立地するため、地点によって土層の層序が異なる。土層観察の結果は以下の通りである。

- | | | |
|--------------|----------|--|
| Ia. 耕作土 | Ib. 暗褐色土 | 粒子は細かく繊りはない。粘性は弱い。 |
| IIa. 黒色土 | | 粒子は細かく繊りがある。粘性は弱い。 |
| IIb. 黒褐色土 | | 粒子は細かく繊りはない。粘性は弱い。 |
| IIIa. 暗褐色土 | | 粒子は細かく繊りはある。粘性は弱い。径 1 cm 以下の多孔質白色、多孔質黄色礫を少量含む。 |
| IIIb. 暗黄褐色土 | | 粒子は細かく繊りはある。粘性は弱い。3 cm 以下の多孔質白色、多孔質黄色礫、青灰色、暗紫色礫を少量含む。 |
| IIIc. 暗黄褐色土 | | 粒子は細かく繊りがある。粘性は弱い。崩れたロームブロックを斑状に含む。径 10 cm 以下の多孔質黄色礫を多く含む他、多孔質灰黑色礫を少量含む。 |
| IVa. 黄褐色土 | | 粒子は細かく良く繊っている。粘性は強い。5 mm 以下の多孔質灰黑色礫を少量含む他、多孔質白色礫を稀に含む。いわゆるローム層である。 |
| IVb. 黄褐色土 | | IVa 層より多孔質灰黑色礫が多い。 |
| Va. 粘土・黃白黄色土 | | 粒子は細かく繊りはある。粘性は強い。径 15 cm 以下の多孔質黄色礫を極めて多く含む。 |



第3図 夕立遺跡土層柱状図 (S=1/40, 柱状図間の距離は任意)

Vb. 粘土質白黄色土 粒子は細かく締りはある。粘性は極めて強い。幅2cmほどの褐鉄鉱が垂下する。

Vc. 粘土質白黄色土 粒子は細かく締りはある。粘性は極めて強い。

VIa. 暗赤褐色土 粒子は細かく締りはない。粘性は強い。

VIb. 白暗赤褐色上 VIa層の土色が白みを帯びた層。締りはない。粘性は強い。

VII. 明黄褐色土 粒子は細かく良く締っている。4cm以下の白色、黄色バニス、6cm以下の青灰色、暗紫色礫を極めて多く含む。

VIII. 砂質黄褐色土 粒子は細かく良く締っている。粘性は弱い。

IX. 砂質灰黄色土 粒子は粗く良く締っている。粘性は弱い。

X. 砂質暗黄褐色土 粒子は細かく良く締っている。粘性は弱い。1cm以下の黒色礫を少量含む。

遺跡地は畑地として利用されており、先土器時代および縄文時代の遺物が散布していた。耕土層下には黑色土が堆積し、調査区北東においてはIIIb層、IIIc層上面で確認された浅い谷状の地形を埋めている。遺物はIIa層からIVb層にかけて出土した。

斜面上方での縄文時代の包含層は、IIa層からIIb層が主体で、IIIc層からも縄文時代の遺物が若

干出土した。斜面下方ではIIa層が欠け、I層である耕土層下にIIb層が堆積していた。調査者の所見によれば、縄文時代の遺物はIIb層からIIIa層を中心に遺物が出土し、IIIb層からも若干の遺物が出土した。縄文時代の遺構であると考えられる土坑はIIIa層上面で確認され、配石もIIIa層から検出された。夕立遺跡の発掘調査においては、IIa層、IIb層は重機により大部分を除去してしまったため、斜面上方における縄文時代の遺物分布について不明である部分が多いが、土層の断面観察によればIIb層の巨礫が混じる部分から土器が出土している。縄文時代中期初頭頃には、調査区北東隅の浅い溝地は黒色土で半ば埋没し、その上面に縄文時代の生活面が存在していたと推定される。斜面下方においては、IIb層からIIIb層に縄文時代の遺物が含まれることから、縄文時代中期初頭前後の斜面形成は、調査区北半に限られていたと考えられる。

先土器時代の包含層についても斜面上方と下方で所属層位が異なる。斜面上方のF3グリッドにおいては遺物包含層はVIa層からVib層であり、地形変換点であるF6グリッドではIIIa層からVIa層上部に、斜面下方のF8、F13グリッドでIIIa層、IIIb層に先土器時代の遺物が包含されている。F2グリッドのVa層からVc層からも黒曜石剣片が数点出土したが、所属時期は不明である。七層間の時間的な関係は土層の形成過程を明らかにしなければ対比できず、現時点では保留しておきたい。ただし調査者の肉眼観察による所見によれば、混入物を含まないIVa層の上層にあたるIIIc層には多孔質黄色礫以外の混入物は少ないのでに対し、IIIb層には青灰色礫などが含まれ、その構成が下層にあたるVII層と類似することから、IIIb層はVII層を母材として形成された漸移層である可能性が強い。また、F13グリッド柱状図にみると、IIIb層下部は層界がかなり乱れているが、F6グリッドでのVIa層とVII層の層界にも乱れが観察される。VII層を基準に考えれば、IIIb層とVIa層は時間的に並行する上層であると考えられる。この観方が正しいとすれば、遺物の垂直分布の検討を行なっていない現段階では、先土器時代の文化層は單一層であるとしか捉ええない。VIa層とIIIb層が同一層序であると考えると、現地地形の形成が始まったのはIVa層、IVb層堆積時から堆積終了時にかけてであったと考えられる。IVa層、IVb層の堆積過程によっては、平面分布からみた遺物集中の原位置に関する評価が違ってくる。IVb層は標高からみればほぼ水平に堆積しているのに対し、IVa層はF7、F8グリッド付近で徐々に層厚を減じながらIIIb層に移行することから土壤の移動、浸食作用を受けていると考えられるが、石器の原位置を損うほどのものであったかは不明とせざるをえない。

八ヶ岳西麓地域の第III段丘面には、新期ローム層の一部が堆積していると考えられている。このローム層は、北八ヶ岳山体付近においては、重鉱物の組成により上部と下部の2層に分離され、上部層は八ヶ岳起源のローム層であるとされている(調査の自然誌地質編集委員会 1975)。夕立遺跡のローム層が新期ローム層のうちのいずれにあたるかについては、肉眼による観察のみで行なった今回の調査だけからは判断できない。夕立遺跡の第四紀テフラについては、今後の土壤試料の分析、現地の再調査によって調査されるべき課題である。

土層の形成に関して重要であると考えられるのは、F2からF4グリッドにかけてみられた褐鉄鉱

層の形成過程である（第3図）。褐鉄鉱層と関連するとみられる土層は、Va層からVc層である。Va層からVc層の分布範囲は褐鉄鉱層がみられる範囲内に限られ、褐鉄鉱層が消滅していくF4グリッド付近ではIVa層と斑状に混じりあいながら、斜面下方にむかうにつれ消滅していく。褐鉄鉱層直下にはIVa層が現れ、F3グリッド柱状圖にみられるように褐鉄鉱に囲まれた部分においてもIVa層やIVb層の層界と連続する分層線が観察されることから、Va層からVc層はIVb層から鉄分がぬけおちて形成されたものであると考えられた。またVb層に褐鉄鉱が垂直に分布する部分がみられ、褐鉄鉱層の表面から「高師小僧」とよばれる管状珊瑚に類似するものが生じていることなどから、褐鉄鉱の形成には、水が関係していると推定された。以上の諸特徴から、調査中は湧水、湿地など、水によるグライ化、鉄分の沈着といった二次的な土壤形成作用を考えていたが、結論をだせぬままに調査を終了してしまった。褐鉄鉱の形成過程については、土壤学の分野に属し、再調査が必要である。褐鉄鉱についてはF6、F13グリッドのVII層下部から下位層にかけての層界を中心に、層をなさない鉄分沈着が観察された。層序の中での位置が異なるF2、F4グリッドにかけての層状の褐鉄鉱との関連が認められるかは不明である。

第2節 先土器時代の遺構と遺物

夕立遺跡から出土した先土器時代の遺物は、剝片、碎片を含め1万4千点にのぼる。器種構成は整理作業途上の現段階で、尖頭器は未完成も含め131点、ナイフ形石器9点、搔器、削器15点、石核15点である。尖頭器はバラエティーに富み、槌状剥離を有する尖頭器25点、木葉形尖頭器27点、比較的小形の尖頭器14点の他、断面形状が半円形を呈し、片方の側縁がふくらむ左右非対称の平面形状をもつ尖頭器10点が現在までに確認されている。尖頭器の破損、欠損品も多い。石器に用いられた石材は大部分が黒曜石であるが、チャート、玄武岩、水晶などできた石器が若干出土している。黒曜石以外の石材による製品として、削器1点、石刃1点、石核1点が確認されている。

先土器時代の遺構としては石器ブロックの存在が想定され、他に櫛群3基がある（第4図）。遺物の平面分布のみからみれば24基ほどの石器ブロックが認められる可能性があるが、遺物の垂直分布、接合関係の検討を経ていないことから、現状では石器ブロックとして認定することはできない。今回の概要報告では平面分布のみを取り上げ、比較的の遺物密度が高く、ブロックとして認められる可能性のある地点を遺物集中として報告するにとどめる。

遺物集中の分布形状はほぼ円形から横円形を呈する。大きさは2mから4mのものがほとんどで顕著な差はみられないが、遺物集中20では約70cmの狭い範囲に遺物が集中する。遺物集中20では、IIIb層調査中にIIIa層が円形に落ち込む部分がみられたが、平面からみると限り遺物集中と落ち込み部分にずれがあるため、現状では遺物集中と落ち込み部分との間に関連性は認められない。また遺物集中17は、ロームマウンドの遺物を除いて全体圖を作成したため範囲が大きくなっているが、分布形状をみると2基に分けられる可能性がある。

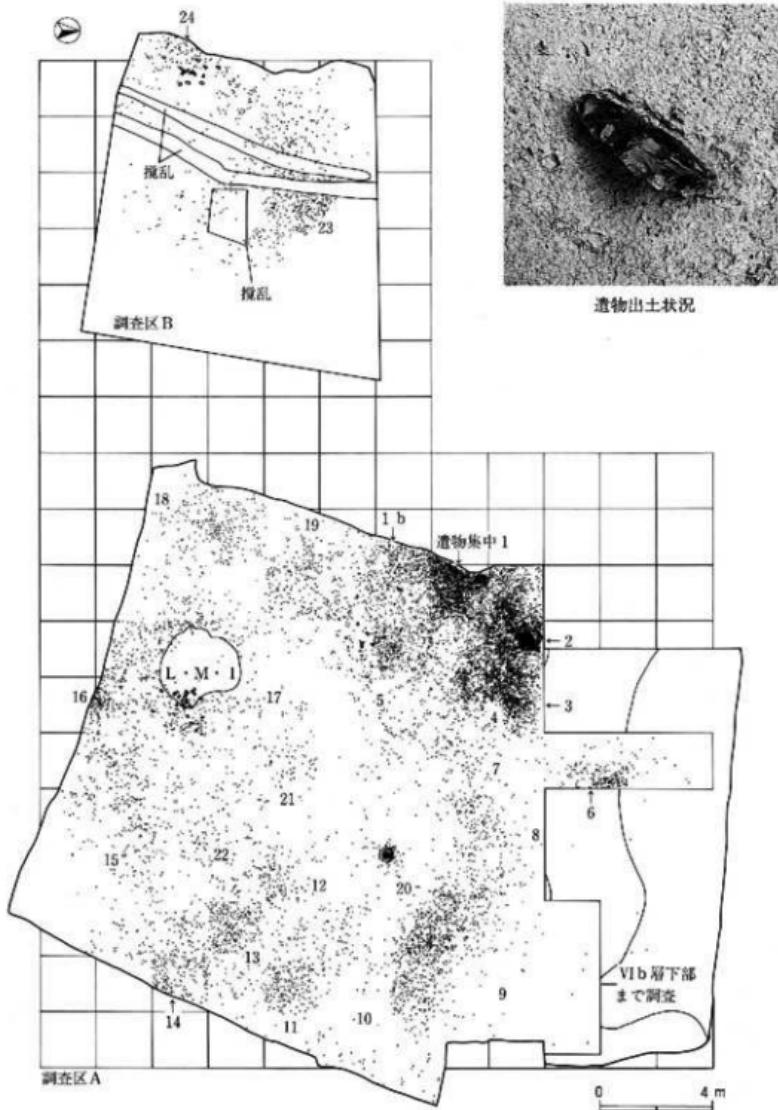
遺物集中ごとの出土点数には大きな差がみられる。出土点数が多い遺物集中は、1000点以上の出土をみた遺物集中1から3である。他の遺物集中についても差がみられるが、ブロックの区分があいまいな現状では、構成点数によりブロックの性格を論じることは不可能である。ブロックを構成する石器の組成についても、現状ではブロック間の比較は困難である。遺物集中の配列は、I区において環状を呈するが、II区にも遺物集中が存在することから、遺物集中が環状に群をなすと言いかることはできない。

遺物集中の所属層位は、調査区内の地点により異なる。遺物集中1、2、3、4、7、8、9はIVa層からVla層に分布し、IVa層下部からVla層に中心をもつ。分布高低差は大きい。遺物集中6はIVa層下部からVlb層上部まで分布し、Vla層下部からVlb層上部に分布の中心がある。上記以外の、調査区南半に位置する遺物集中は、IIIa層からIIIb層に分布の中心をもち、VII層は無遺物層となる。

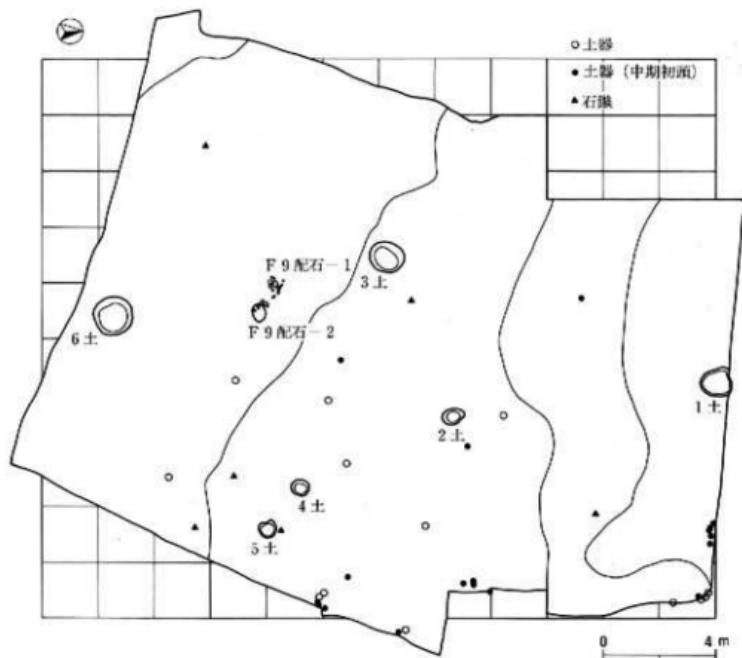
第3節 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の出土遺物には土器片と石器があり、表面採集で凹石1点が採集されている。縄文時代の剝片、碎片、石核については、先土器時代の剝片類との分離が困難である。土器片および石器の分布範囲をみると調査区東半に偏る傾向がみられ、縄文時代の遺物包含層は現在の道路下の部分に広がっているものと思われる(第5図)。ただし、縄文時代の包含層は重機による表土剥ぎの際に破壊したものと思われるため、縄文時代の遺物散布範囲が調査区東側のみに偏っていたというわけではないと考えられる。事実、II区からも石器が出土している。土器は縄文時代中期初頭のものの他に、L7グリッドから燃糸文がほどこされた土器1点が出土したが時期は不明である。中期初頭の土器の主体は梨久保式土器であるが、時間差をもつ可能性がある。底部を四角形に成形する鷹島式土器1点が伴う。

縄文時代の遺構としてとらえたものに土坑6基、配石2基がある。いずれも遺物を伴ってはないが、先土器時代の遺構であると考えられる礫群がIIIb層から検出されたのに対し、IIIa層で検出されたことから縄文時代の遺構とした。土坑は、大きく分けて3種がみられる。径1mほどで壁面の立上がりがしっかりした土坑として、第1号土坑、第3号土坑、第6号土坑がある。これらの土坑に比べ比較的小形で、立上がりが緩やかな土坑として、第2号土坑、第4号土坑、第5号土坑がある。このうち第2号土坑は、焼土と礫を伴う点で他の土坑と区別される。第2号土坑の焼土は坑底直上から検出され、坑底も火を受けたらしく硬くしまっている。配石1は偏平な円礫を1.5m×1.5mの範囲内に敷き詰めたものである。周囲のIIb層、IIIa層からは炭化物粒子、炭化材が多く検出された。配石2は、やはり偏平な円礫を直交させるように配列したものである。配石下部には、漸移層内にとどまる浅い掘り込みがみられたが、焼土は確認できなかった。いずれの配石も遺物を伴わない。



第4図 先土器時代遺物分布図 (S=1/200)



第5図 桶文時代遺構・遺物分布図 (S = 1/200)



図版1 第2号土坑（南から）



図版2 配石1（南から）

第V章 今後の課題

夕立遺跡の整理作業は現在継続中であり、本書は途中経過の報告である。ここでは今後の整理作業と調査研究の方針を示し、まとめにかえたいと思う。

調査報告を行なう上で基本的な作業である、ブロックの認定と遺物組成、ブロック所属層位の確定と遺物分析による時期差の有無の検討、接合作業によるブロック間の関係の把握などを行なううえでも、幾つかの視点が見出される。

まず黒曜石原産地との関連において、夕立遺跡の性格を把握することである。北八ヶ岳から霧ヶ峰高原にかけては、日本でも有数の黒曜石産出山地として知られている。現在、長野県教育委員会、長野県考古学会を中心に、黒曜石原産地、および黒曜石原産地直下の遺跡について調査研究が行なわれている。茅野市域においても、冷山を始めとする黒曜石原産地と、黒曜石原産地直下の遺跡として渋川遺跡群が知られている。夕立遺跡は、北八ヶ岳山岳地帯の原産地からやや離れた地点に立地し、しかも尖頭器未成品、ポイントフレイク、削片が出土していることから、石器製作は盛んであったと考えられる。夕立遺跡を石器製作址としてとらえれば、冷山、麦草峠以外の原産地の有無と、石器原材の産出地別石材構成が、先土器時代の移動領域、黒曜石の採取、運搬過程の内容に関連し問題となる。この点で、夕立遺跡出土石器の石質同定と、原材形態のあり方を明らかにすることが必要である。

石器製作技術に関し、石核は石刀技法の存在を想定しうるものから、粗い剥片剥離を行なった石核まで幾つかの類型が設定しうる。また石核と尖頭器未成品が接合した資料があり、尖頭器素材作出のための黒曜石分割と、縦長削片の作出のための石核の素材作成が同時に行なわれていたと思われることから、器種別の石器製作技法の存在が想定される。ブロック間の遺物組成を石器製作技術の解明という視点から読み直すことによって、尖頭器を主体とする石器群がもつ石器製作技術の内容を明らかにし得る可能性がある。

ブロックあるいはブロック群が先土器時代の集団構成を反映していると考えると、ブロック間の石器接合関係が重要になる。石器接合作業からブロック間の関係性を把握することで、重複関係にある多くの遺物集中の形成過程が明らかにしうると思われる。現在接合資料は7例であるが、5例は破損あるいは欠損した尖頭器が接合した事例であり、他の2例も含めて個々の遺物集中内にとどまる接合資料である。ブロック間の関係性をとらえるためには、遺物集中ごとの石材組成を調査することも重要である。黒曜石石材の石質同定と石質組成の比較検討は、接合法によるブロック間の関係性の推定を補足する意味をもつ。また黒曜石以外の石材による石器は数少ないながらも、興味ある分布を示している。夕立遺跡から出土した黒曜石以外の石材には頁岩、玄武岩、水晶などがみられるが、黒曜石以外の石材による石器が出土した遺物集中は、1b、5、17、23である。最も多く出土した遺物集中17では、ロームマウンドから出土した遺物も含めると、水

晶1点、頁岩5点、玄武岩1点の計7点が出土している。いずれの遺物集中も、調査区西半に偏っていることから、黒曜石以外の石材の保有状況から先土器時代の集団差を考える手がかりが得られる可能性がある。

夕立遺跡出土の尖頭器は、入念な調整を施した完成品とみられる尖頭器を含み、形状の変化が大きく形態分類が可能であると思われる。遺跡全体から出土した石器の器種構成においても尖頭器のほかにナイフ形石器、搔器、削器などを伴うことから、夕立遺跡は生活址としての性格ももっていたと考えられる。遺物集中が石器ブロックとして認められた場合、ブロック間の遺物の比較検討により、夕立遺跡で行なわれた石器製作を含めた生活内容を明らかにし、原産地直下の遺跡との比較を可能にすることが遺跡の性格を明らかにするうえで必要である。

夕立遺跡を生活址としてとらえる場合、ブロック以外の遺構として礫群、配石がある。礫群は調査中に3基を確認し、いずれも小規模で、遺物集中と重複している。このほかに遺物集中15の付近に礫が散在し、石質の検討を経れば礫群と認定できる可能性がある。礫群3基の中でも、No.1とNo.2、No.3では若干石質が異なる印象がある。配石については礫の石質、配列の検討が不十分であるため、図示することはできないが、全体に遺物集中の縁辺に多く検出された。配石に関連して、石器製作のための台石、敲石の存在が先土器時代の集落を論ずるための一視点としてとりあげられている(鈴木忠司)。夕立遺跡の台石、敲石は現在数点が確認されたのみで、今後敲石については数量が増加すると思われるが、石器接合関係や黒曜石以外の石材による石器の分布状況と考え合わせることにより、遺物集中の群別の基準となりうると考えられる。

夕立遺跡を諏訪、八ヶ岳山麓地域の先土器時代遺跡と比較する場合、八ヶ岳山麓の第四紀テフラの広域的な調査が必要である。諏訪、八ヶ岳山麓地域のテフラは御岳、乗鞍岳を給源火山とする「伊那谷型ローム層」であるといわれているが、八ヶ岳起源のテフラも混在するともいわれ、複雑な堆積状況を示している。夕立遺跡では、文化層の上位にローム層が堆積しており、近隣の先土器時代遺跡である上見遺跡の堆積状況とは異なっている。桝木地区周辺の開墾整備事業により、台地そのものを削平している現状の中で、先土器時代の地形、環境の復元を目標に含めた茅野市域での新規テフラの調査が急務である。

繩文時代中期初頭の遺跡には上見遺跡、鶴田遺跡など土坑以外の遺構が検出されない遺跡がある。夕立遺跡には竪穴住居址が発見されない点で、上記の遺跡に似ているが、配石を有する点が異なっている。七坑内部で火を焚いたとみられる第2号土坑の存在も考え合わせると、遺跡内で行なわれた繩文時代人の生活内容は、小遺跡ながら複雑なものであったといえよう。配石と第2号土坑の火を焚いた痕跡、および石鐵を主体とする遺物組成が一連の行動によって残されたと考える根拠はないが、広大な山麓地域での狩猟活動のあり方を想定でき、繩文時代の生活領域とその利用を考えるうえで興味深い資料である。

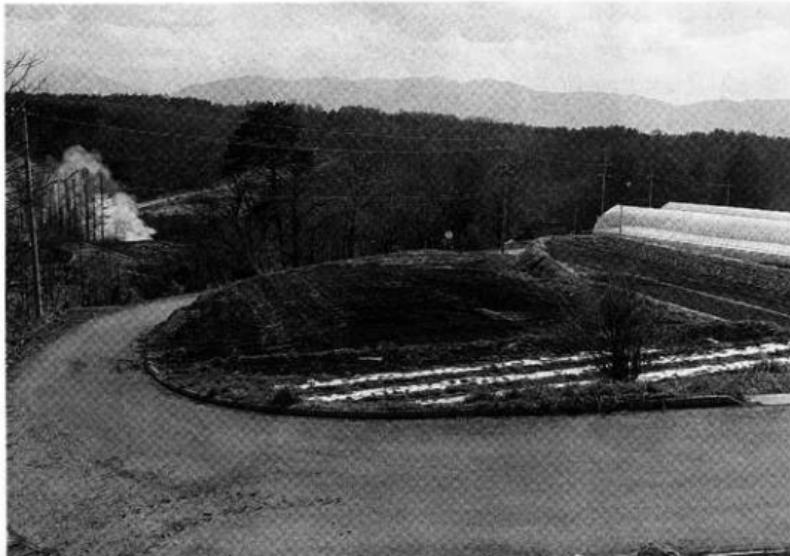
諏訪湖周辺から八ヶ岳山麓地帯は、繩文時代中期文化が隆盛した地域として全国に知られている。その繩文時代文化の影にかくれたかのような感のある先土器時代遺跡であるが、日本有数の

黒曜石産出地帯をひかえ、山岳部を中心に多くの遺跡が形成されていた。茅野市域においても、八ヶ岳山中において豊富な黒曜石産出地帯を背景とした遺跡群が知られているが、山岳部以外での先土器時代遺跡の広がりは不明である部分が多くあった。夕立遺跡の調査により、山麓台地にも先土器時代遺跡が存在することが確実となった今、周辺地域の圃場整備事業など開発にあたっては細心の注意を払わなければならない。

夕立遺跡についての調査研究は、まさに始まったばかりである。今回報告した内容は、遺跡全体がもつ情報のごく一部に過ぎない。調査担当者の責任において、今後整理作業を続け、本報告の刊行にむけて努力していきたい。

引用参考文献

- | | | | |
|---------------|--------|----------------|----------|
| 諏訪の自然誌地質編集委員会 | 1975 | 『諏訪の自然誌 地質編』 | 諏訪教育会 |
| | 1986 | 『茅野市史 上巻 原始古代』 | 茅野市教育委員会 |
| | 1986 | 『茅野市史 別巻 自然』 | 茅野市教育委員会 |
| | 1991 a | 『茅野市遺跡台帳』 | 茅野市教育委員会 |
| | 1991 b | 『上見遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| | 1992 | 『中原遺跡』 | 茅野市教育委員会 |
| | 1993 | 『鶴田遺跡』 | 茅野市教育委員会 |



図版3 調査前遺跡現況（北から）



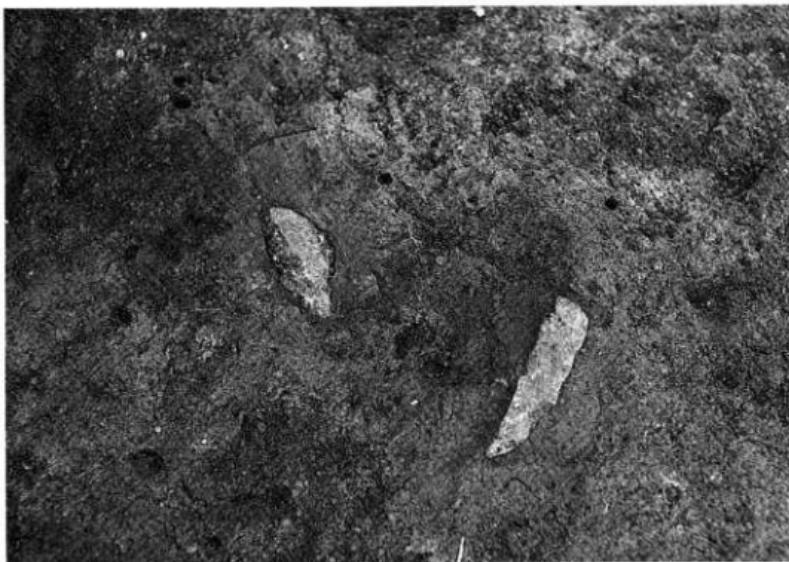
図版4 滝跡風景（南から 手前は柳川）



図版5 F6 グリッド土層断面
(西から)



図版6 調査風景（北から）



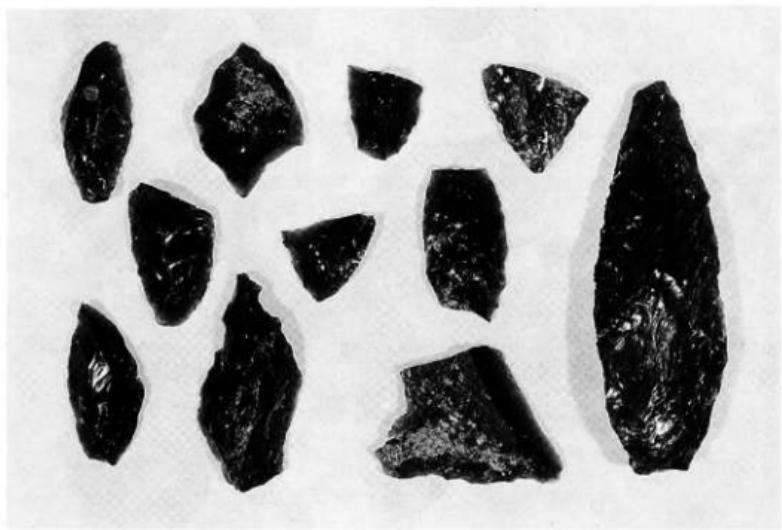
図版7 漢物出土状況



図版8 碑群No.1 検出状況 (南東から 箭は遺物出土地点)



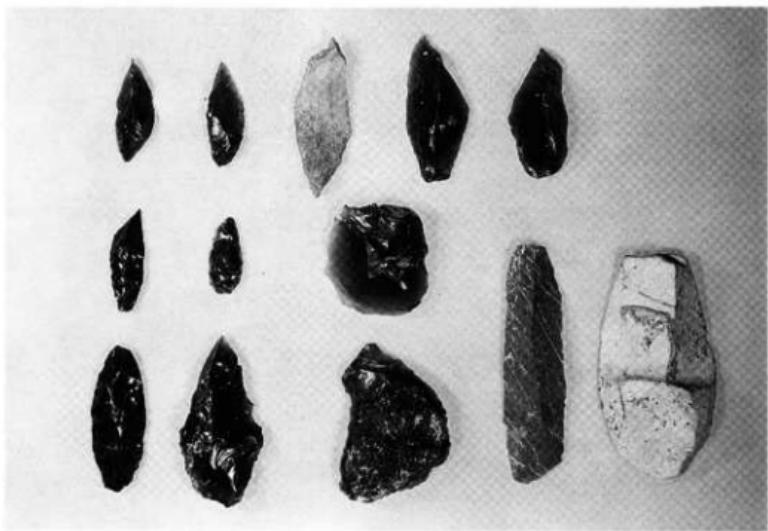
図版9 遺物集中1 出土遺物



図版10 遺物集中9 出土遺物



図版11 遺物集中17 出土遺物



図版12 ナイフ形石器他 出土遺物

夕立遺跡

— 平成 4 年度県営団地整備事業概要地区に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書 —

平成 5 年 3 月 16 日 印 刷

平成 5 年 3 月 18 日 発 行

編 集 長野県茅野市塚原 2 丁目 6 番地 1 号
発 行 茅野市教育委員会

印 刷 ほおづき書籍株式会社
